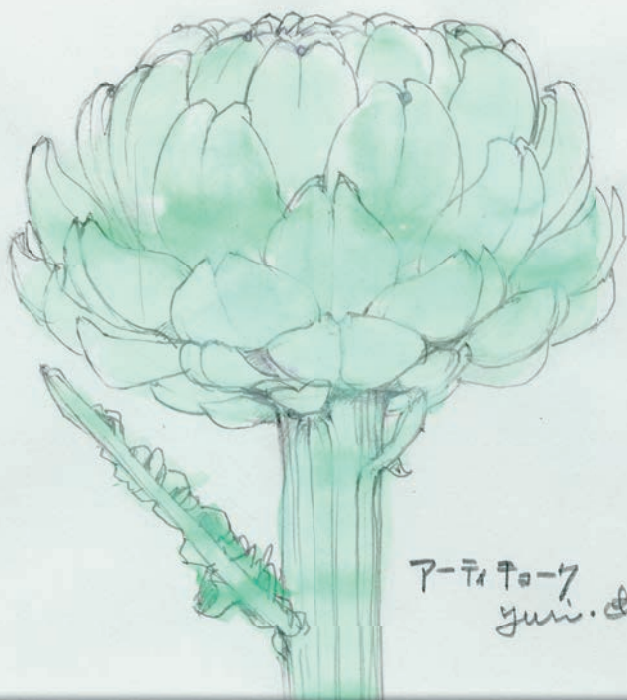


三河 アララギ

平成三十年 2018年

十月号

第六十五卷 第十号



ニューヨーク日記(144) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Blue Shoe Diaries



実はShoeLadyの今回の日本のお仕事にはBlueCatも興味あったのです。ローリン・ヒルのコンサートにお母さんとセバスティアンと一緒に招いてもらいました～ShoeLadyもやるじゃん！と～っても良いショーでした。超満員でした。超感動でした。帰って友達に自慢しなきゃ。

ShoeLady's Japan project this time was actually something I was looking forward to! So with mom and Sebastian in tow, she invited us to see Lauryn Hill's show in Tokyo! yaay! It was a great show! I want more!

目次

第六十五卷第十号(通卷七七八号)

表紙・アーティチョーク 今泉 由利(1)

ニューヨーク日記(14) Blue Stone(2)

黄素馨の門 御津 磯夫(4)

三河アララギ歌集VI 大須賀寿恵(5)

歌集「續草々」 今泉 米子(6)

三河アララギ歌集VI 河原 静誠(7)

朝光 岡本八千代(8)

黙禱 弓谷 久子(10)

高層ビル 今泉 由利(12)

今日の始まり 安藤 和代(13)

会釈 清澤 範子(14)

秋を探して 伊藤 忠男(15)

i P S 阿部 淑子(16)

蝉時雨 森岡 陽子(17)

夏の富士山 白井 信昭(18)

台風通過 杉浦恵美子(19)

大豆 山口千恵子(20)

猛暑 夏目 勝弘(21)

『いこよせ』 いーはとぶ

鈴木美耶子(22)

吉見 幸子(22)

牧原 正枝(22)

石田 文子(22)

森 厚子(22)

山崎 俊子(23)

三田美奈子(23)

水野 絹子(23)

牧原 規恵(23)

稲吉 友江(23)

現代学生百人一首 東洋大学

重田 彩菜(24)

山本 花奈(24)

中原 桃子(24)

岸澤真帆香(24)

丸山 梨緒(25)

岩谷 和斗(25)

澁谷 伊織(25)

蛭間 美妃(25)

森岡 陽子(26)

贈呈誌
日本橋音頭
『俳句』

高橋 育郎(28)

松本 周二(30)

重野 善恵(30)

今泉 由利(30)

柳田 皓一(31)

山迫 京子(31)

山元 正規(31)

森岡 陽子(32)

田中 清秀(32)

植村 公女(32)

今泉 如雲(33)

杉浦 弘(33)

田中 清秀(34)

丸山醉宵子(36)

江上 浩二(38)

山本紀久雄(40)

今泉 雅勝(42)

平井 茂行(44)

中屋 保之(46)

本田 勇気(48)

『歴代天皇御製歌』(九十三)
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

萬葉秀歌の鑑賞 貫名海屋資料館(52)

御津磯夫短歌鑑賞 津之地直一(54)

「氷魚」のことから(213) 鮫島 満(56)

編集室だより(二〇一八年八月) 岡本八千代(57)

野菜・まんだら(8) 今泉 由利(58)

「三河アララギ」について(60)

黄素馨の門(昭和四十一年〜昭和四十四年) 御津磯夫

ひむがしのみささぎ出でて淨まりて馬酔木の下の水に手を洗ふ
つかれつつ氷雨にあひてこえたまひし石切峠は地図にのみ見る
たづねゆく東の陵に岐るる路ゆきすぎてみたびところをぞ問ふ
みささぎに直にむかへる沙ふかしふたりまゐりしあとをのこさず
かくれ里田原の茶山一つへだて父子のみかどのしづまりゐます
くれなるにあしびの夏芽照り匂ふみ垣にそひて歩みとどめず
鉢伏は是より石切ここよりと見つついひつつ山路すぎゆく
癒ゆる日をいつとたのみて子のいのちかけし手なれのピアノを拭ふ
病棟へかへりゆく子をともなへり帝塚山古墳のまへをすぎつつ
三輪の山二上山も三上山も一日にすぎてわがとどまらず

三河アララギ歌集VI

大須賀寿恵

打ち寄する潮は澄みゐて潮の底の貝殻白じろ見えゐるあはれ

梅花空木の小さき緑の尖り芽に降りそそぐかなけふの木の芽雨

大き鉢にと植ゑ替へにけり来年もと心に恃む小さきポロニア

わが部屋に午後の日の光ゆらぎつつ畳みてをりぬ洗濯物を

よたよたとゆらぐ歩みに畑にゆき甘夏柑の落ちしを拾ふ

カニ草の鉢に高々と伸び立ちて黄の花かかぐるカタバミの花

もくろみは布団を干さむことなれどわくわくとして早く起きたり

しめじめと鉄平石に雨ふりて翹たたみをりしじみ蝶ひとつ

鍋の湯にをどりつつゐて鳴門わかめみるみる緑にふくらみてゆく

浅漬の胡瓜かみつつ奥の菌の健やかなるを吾はたのしむ

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

引馬祭近づきながら寂けさよ庭隅の椰子に九日の月

笹竹の秀の上に潤む十三夜なごりさへなし昨夜の祭りの

轟きも絶えはてしごととアングスのモレノ氷河の崩るるところ

梧桐の高き繁りの影おとす窓にはものの音なきごとし

廣き葉の大明竹の今年竹ゆらゆらと立ちそろひつつ

過現未を忘れ果てつつ撓みたる笹竹に降る暮れがたの雨

さだめなく青笹群の秀の垂れてもの忘れぬしごときときのみ

豫報より遅れおくれし今朝の雨笹竹のしづまりにけり

白よりも皓しろき花片ひろげつつはやよそほへる夜會草の花

あるがままにと思ひあらたに思ふとき文字太く見ゆ事實唯眞の額

三河アララギ歌集VI

河原静誠

ゆるゆると緑のらせん解くる見て真白き夜顔の花聞きゆく

一閑人の蓋置は井戸を覗きをり水旨かりき十王寺の井戸

アララギの父なる文明先生はああ臘八に逝きたまひたり

在すが如く白妙のダチュラの花捧ぐ藍美はしき祥瑞の壺

看病は福田なりと説きえ給へる遺教経をくりかへし誦む

守本尊の不動明王を覗き見る根付の小さきひさごの中に

お正当の日の間近なる日曜日微笑大師を洗ひ浄むる

赤の黄の紙風車を手わたしぬ微笑大師の参詣の人に

さらさらと音をたてつつ二百余の紙風車廻る今朝の本堂

甘茶煮る甘き香のたちこむる四月八日よ吾の厨は

朝あさ光かげ

蒲郡 岡本八千代

糸瓜忌の近づく夕べの大嵐つひに去りゆきし今日の朝光あさかげ

思ひ出せぬ人の名前が思ひ出せてそこはかたなく朝光の中

東ひんがしより朝光輝やく部屋にこもりメ切近かき原稿書き出す

けふもまた我ありて思ふ子規のこと九月十九日ああ瀬祭忌近し

ムクゲ庵と名づけし狭きわが部屋に独りこもればやうやく落ち着く

子規書きし「歳旦帳」とふ二冊出でし今朝の新聞切りぬきておく

朝光のけふの深空みの遠々しいつまでか仰ぐ君よ何処いづこか

何やかやと君の御骨も斂めずに一日一日が過ぎゆくわたくし

面影も遠しづまりてわれ佇ずむけふも朝光広がる庭に

台風の残り風にもゆれゆるる志賀山寺萩の丸ろきみどり葉

初盆とて来たりし東京の曾孫ら曾祖父ゐないとはやばや帰りぬ

真夜更けて目ざめて独りに聞こえる雨だれの音のその残り音

いつまでも君との思ひ出近くにて庭の草花「忘れ名草」探す

現世のわが籠り部屋の東の窓に明るき十五夜の月

書きかけの手紙の文を考えつつ時々に見る窓の十五夜を

黙 禱

豊川 弓 谷 久 子

サイレンに合はせて黙禱一分間大空襲に逝きし友等よ

十代の君の笑顔が浮かび来る七十三年たちたる今日も

あかときに収穫されしか玄関にとうもろこしの置かれゐる朝

記録的と今日もテレビが告げてをりゲリラ豪雨に最高気温

ドラキュラと称して一日こもりをり何時まで続くこの炎天ぞ

頼み置きし白菊盆に間に合はず高砂百合を庭より剪りぬ

墓参りも子に任せたり迎え火も送り火も無く盆は過ぎゆく

百日紅の花高々と庭に咲く猛暑も酷暑も何処吹く風と

スエ先生が手を振りてをりなつかしき胸に溢れて夢より覚めぬ

眼鏡のレンズ拭きて又読むあゆちゃんが始めてくれし小さな手紙

台風より立ち直りたる朝顔のとりどりの花とりどりの色

桔梗咲き終日咲きと始めての朝顔の花楽しむ今朝も

御津川より白鷺一羽飛び立ちぬ真白き翼青空に映ゆ

蛙も蛇もとかげも住みゐる草庭に散水しをり涼風立てよ

訪れる人待つ如く門先にひまわり咲き初む小首かしげて

高層ビル

東京 今泉 由利

富士山も筑波山も見ゆる範囲高層ビルより広きを望む

西窓に所在確かな富士山よ見えざるままを見守りゐたり

大都会の物音ひとつも聞こえぬ強度ガラスに囲まれゐるよ

東より西へ移りてゆく間間の十六夜の月月を観てゐる

ほんの少し太陽に近づきしこと高層ビルの二百五〇メートル

十六夜の月の光のきらきらと今日の私のバスタイム

十六夜の月の光に照らされて私の影のしつかり黒い

種の無いマスカットを頬張^{ほおば}りぬ何か足らざる思ひのままに

藤田画伯の自画像とゐるしばらくは新しきこと次次見つく

毎日の道端にありねこじやらし今日吹く風に枯色揺るる

今日の始まり

豊川 安藤 和代

すずめ鳴き遠く犬なき鳩もなく朝顔三花今日の始まり

高齢で就職などは無理と知る知りつつ今日も求人欄見る

アララギに見ぬ友の歌この月はありてうれしやふる蝉しぐれ

何もかもいやになる日がふとあれど短歌づくりに救われている

「俺よりも先に逝くな」と言ったのに妻を亡くせし兄ポツリ言う

バイトして孫のくれたるTシャツは心ほっこりとっても涼し

軒先のくもの巣に蜻蛉かかりをり生きるとは問ふ終戦記念日

猛暑にも暦の上は立秋にて庭に小さく萩が揺れている

就職も決りて孫は家族等に囲まれ笑顔で饒舌となる

孫子等の集ふ盆の夜賑やかに迎え火までもゆれて輝く

会 釈

春日井 清 澤 範 子

暦の日の出午前四時五十二分増築の窓より陽は差し始む

バイクの音して朝刊を受け取りぬ玄関のタイルにポツポツの雨

巾狭き歩道を人と向ひ来ぬ吾会釈して通り過ぎたり

大根の葉にはビタミンの多くして柔らかき葉を一夜漬けにする

売り出しの蕪の大玉買ひてこし莖は細かくたたきて漬ける

ダリアの花大きく鉢に咲き続く穂高の郷の庭に咲く頃

八王子神社に詣で柏手を打つ時聞きぬ初蟬の声

神社に詣で心静めて帰り来ぬ日々草の花に水やる

婿もなき娘と暮せば折々にそれも良きかなと一人思へり

雨の中にも鳥の声あり廊下より庭に育ちし椿見てをり

秋を探して

大阪 伊藤忠男

朗らかな友の笑顔に安芸の海写す夜景も輝きを増す

眞弓の木しなり返すか背を反らす失意泰然得意淡然

律すれば己を越えし歳と共見えしその先淡くなりゆく

朝晩の吹く風しみる我が身なり酷暑に耐えし今年なりとて

待ち遠しすじ雲いつか今日もまた見上げる空にまだ猛暑雲

さらば夏ひまわり萎れ赤トンボ実りの里にのどかさ戻る

時ところ久しぶりとて懐かしき心惑わす秋風の夢

まだ暑さの残る長月秋ごよみ旅の案内は紅葉一色

汗を拭き帰る坂道虫の声しばし足止め一呼吸おく

いかにして季節を知るや猛暑とて蝉の鳴く声聞こえなくなり

i P S

横浜 阿部 淑子

体温を超える猛暑は息苦し蝶の舞にも羽重く見ゆる

i P Sでパーキン治験世界初年内移植祈る成功

数学と生物学の接続は「素数ゼミの謎」解き明かす今

考古学原子レベルに進みきて骨の破片で家畜を特定

へり墜落救助に尽しし勇者をばなぜに救えぬへりの危うさ

甲子園の必死に戦う球児達決勝終えて称賛の虹

池江金「絶対負けぬ」と信念で前人未到六冠達成

蝉時雨

東京 森岡陽子

蝉時雨途切れ途切れに聞へつつ網で追ふ追ふ子等大騒ぎ

滝行の跡に滴る岩肌に光一すじ水輝きぬ

乾杯と又乾杯と暑気払いビール日本酒赤坂の夜

三昧の音に勝新太郎の江戸端唄今宵聞ゆるラジオから

水母の子今朝生るるは粒ほどに三日目や四日目水母の姿

散歩道右から聞ゆ夏の蝉左から聞ゆ秋の蝉声

石鳥居手水のこぼるる水の先白萩まだまだ蕾のままに

あの映画この映画をと予定たつ涼しさ求め足げ繁く通う

思い出はアールデコ様式美術館ここのプールで遊びし昔

台風が去って又来る秋始め豪雨のこわさ災害再び

夏の富士山

豊川 白井 信昭

シルバーの今日の後番に家を出る猛暑日の炎天の道

萎えそむるナスとピーマン朝夕に水遣りするを我の務めと

朝起きの階下に降り立つ東の窓に蝉時雨せみしぐれ今年初鳴き

懐かしきスバルライン麓より樹海のなか幾曲りつつ

五合目の二、三〇〇メートル駐車場降り立つ外のこの涼しさよ

人ごみに妻と歩める雲上閣こみたけ小御嶽神社眺望きかず

西湖すぎ道外れやがて鳴沢の溶岩水穴いまし着きたり

氷穴のひんやりとし薄明かり岩穴せまく身を屈めゆく

長閑なる牧場のどか広く見渡せる草原にホルスタイン達

堤防の傾斜なだりに埋めし石の跡今はマオウの茂れるところ

台風通過

蒲郡 杉浦恵美子

嗚呼屋根が飛ばされたとして如何とも出来ず深夜の台風通過

風情など露ほどもなきこの夏の暑さよ今日も草取りもせず

この夏の暑さに呼応するごとく庭の無花果たわわに実る

いそがしき頃あればこそ今がある下部温泉再訪したり

地蔵盆始まる迄の見張り番赤い提灯ゆうらり靡く

見上ぐれば樁の大樹枝を張り北向き地蔵を護りて居たり

大正期村人の信心深くして祭百年細々続く

我が夫は一日二回も風呂浸る習慣なりき湯船に思ふ

こんなにもゆったり湯船に浸かり居るゆとり生まるる秋の訪れ

猛暑経て突然秋がやって来た沁々夏を送る間もなく

大豆

豊川 山口千恵子

手鋤にて乾ける庭の草をかく節々より土に根をはる草々
姦ましき鳴き声に暑さ増す思ひ蟬も鳴かざり昼暑きかな

朝より蟬の鳴かざり炎天に乾ききりたる日々思ふなり

炎天に大豆は青き葉を保ち時折吹きくる風にそよげる

一面に大豆の畑の続きつつ干天の日々に萎えることもなし

はなび草はつひに小さき花一つ暑き夏の日々咲き続けたり

最初はためらふごとく鳴き始む今年はじめてつくつく法師

豊川海軍の工廠跡に成る芝生美しき平和公園

巡りゆく当時のおもかけそのままの防空壕あと又火薬庫あとなど

法師蟬しばらく鳴きて静まれり秋には未だ遠き思ひす

猛暑

豊川 夏目勝弘

北側を塞ぐ松原を通り来る風を恋ひつつ暮す日日なり

万葉の歌人は暑さを歌にせずただに恋をば第一として

網戸よりの風を恋ひしもしかたなし作れる風にて眠るしかなし

風吹くを恋ふれば台風の風が来ぬ庭のネムノキ倒さず去りぬ

台風は生き物ゆゑに行き先が常と違ふもせんかたのなし

台風の去りて残ししは猛暑なり南の海でしぶとく生きゐる

腰に吊す温度計が朝より熱中症の注意を知らず

耐へがたき暑さゆゑに耐へゆかむ「言葉の魂の哲学」を読む

作りたる風は硬しも網戸より入りくる風は何時になるらむ

大空は灼灼くとして雲のなし黒鳥カラスも姿を見せず

『いじよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

時々ストレッチしつつ機の内にポルトガルへはまだまだ遠し
ナザレにて今日のランチは焼き鯛ナイフフォークにて頂く愉し

鈴木美耶子

夫と二人スマホデビューにチャレンジす教へられたり我教へたり
水無月の錦通りを歩きたり我見つけしは茅の輪のミニチュア

吉見幸子

いつしかに朝な夕なと見つめる目高「みゆき」と夫は暮らしぬ
何年も手やら足やら塗つてゐるかゆみ止めには局所麻酔剤

牧原正枝

さはさはと棕櫚の葉ゆらし風通る梅雨明け近し東へ雲行く
境内の松に下りし風鈴のかすか鳴りをり猛暑の中に

石田文子

暴風雨に停電の夜のけふ明けて「ひまわり」の湯舟の吾ら家族は
爽やかな気分のままに立ち寄りしヴィラの如き吾子の家かな

森厚子

また今朝もアサギマダラのひらひらと飛びきて遊ぶ草草の庭に
蟬の声間遠に聞こゆ昼さがり読みある「ふゆくさ」閉ぢては開く

山崎 俊子

電線に子燕らきてバタバタと無器用に止まりゆらゆら並ぶ

たつたひとつのコンビニも消え服屋も消えロバのパン屋さんももう来なからう

三田美奈子

かの池もこの池さへもその昔子を呑み込みて今日の静けさ

何故かしら水ずく屍はありありと面差し残し言ひ伝へらる

水野 絹子

葉はすべて枯れて哀れなるほほづきの茶色き中に赤き実のあり

盆までと願ひを込めて水をやるほほづき赤き実よ残れよと

牧原 規恵

茶房にて友と過しし昼下りグラスの氷静かに溶けつつ

わが腕に身を委ねたるみどり児の時折見せる小さき片えくぼ

稲吉 友江

現代学生百人一首

東洋大学

海岸のゴミ拾いして思うことだから地球が死んでいくんだね

昭和学院秀英中学校二年（千葉県）

重田彩菜

すれ違うその瞬間さえ意識して気にしないふり前髪いじる

昭和学院秀英中学校二年（千葉県）

山本花奈

ふつふつと教室の中声の波広がっていき私はクラゲ

西武台千葉高等学校一年（千葉県）

中原桃子

知能増え機能も増えた機械達人の個性は絶滅危惧種

西武台千葉高等学校二年（千葉県）

岸澤真帆香

朝七時あふれかえった柏駅改札口は巨大掃除機

千葉県立小金高等学校二年 丸山梨緒

ツイッターたった一言炎上しその後の自分消えてしまった

千葉県泉高等学校一年 岩谷和斗

無愛想ラインと電話でキャラ違う口から出ないラインスタンプ

千葉県泉高等学校一年 澁谷伊織

若者はどんな文にも(笑)つける喜怒哀楽を失い探す

千葉県立流山南高等学校二年 蛭間美妃

贈呈誌

森岡陽子

秋楡

創刊一〇〇号おめでとうございます

八月号

○田園に広がる麦の色合いの移ろいゆけりめざましき季とき

加藤和子

○里山にみどりの風が吹き抜けて朴葉餅食む子らは明るく

高木啓子

○巡り来る春の気配に伸びゆける花には花のルールあるらし

坪根恭子

鹿兒島アララギ 8月号

○鯉泳ぐ小さき池にもみじ葉が一葉散り来てあかるくなりぬ

増田教子

○梅雨明けの発表ありてわが島の早苗田日毎緑濃くなる

中山タマエ

○梅雨晴の峡の水田はしごもりて影引きながらあきつは群れぬ

浜畑松枝

○わが町にも避難警報がつひに出づ一方では外に出るなといふマイク

益山芭子

冬雷 9月号

○ざらつとした生みたて卵手にとりて何にしようか親子かオム井

山田和子

○刈り残せる庭の草叢をランタンと月の光が交じりて照らす

大久保修司

○シャラの木の切り株に出た「ひこばえ」は見事に育ち白き花咲く

永光徳子

○ハマナスを時折り揺らす浜風は怠さと欠伸のこし吹きゆく

山口嵩

○まがりくねる流れる水の上を飛ぶ青鷺すなおに曲がりつつ飛ぶ

矢野操

○庭石のくぼみの水に小止みなく雨の輪うまれ消ゆるひねもす

中川眸

○飛びをれば「スワロー」と言ひ巢にをれば燕と思ふいま飛びゆきぬ

佐藤靖子

日本橋音頭

高橋育郎 作詞

一 ハア 花の東京 日本橋

日本のまんなか めでたいな(ソレ)

五つの街道 伸びて行く

みんな揃って 輪になつて

サアさ 踊れ踊れや シヤシヤンとな

シヤシヤンとな 踊れや

二 ハア お江戸日本橋 魚河岸の

繁昌ますます 栄えてる(ソレ)

並ぶ店々 人通り

文化の花が 香り咲く

歌え踊れ踊れや シヤシヤンとな

シヤシヤンとな 踊れや

三 ハア 江戸の名残の 人形町

三味も懐かし 道筋は(ソレ)

甘酒横町 浜町へ

芝居で賑わう 明治座よ

浴衣姿の 粋な人 シヤシヤンとな

シヤシヤンとな 踊れや

四 ハア 未来に開ける 日本橋

アーチの石橋 空うらら(ソレ)

水の流れに 光る屋根

鳩が飛び立つ 西東

サアさ 踊れ踊れや シヤシヤンとな

シヤシヤンとな 笑顔満開

『俳句』

日に灼けし石に水掛け原爆忌

松本周二

哀惜も思慕もありけり影灯籠

敗戦日喧嘩をしてはなりませぬ

厨事止めて黙禱原爆忌

重野善恵

ひぐらしや伏せて置かるる文庫本

送り火や煙の果の細き月

瓢箪の姿定まるこの日頃

今泉由利

十五夜をひと日過ぎたる照り加減

天の川窓におほきくありし頃

運不運語りし父の敗戦日

柳田皓一

新走り銘柄聞きて飲み干せり

朝霧や枯れし杉玉吊られをり

八月の海風てをり十五日

山迫京子

天然の水に醸して今年酒

五臓六腑に沁むてふ夫の新走り

沈む日の草の温もり突惑ひ

山元正規

牧水の泊りし宿や新走り

をちこちを風のつなげる虫の声

含み香に比ぶ新酒は旅気分

森岡陽子

杉玉のかかる成田の新酒かな

息深く背伸び大きく今日の秋

ぐい呑みの大きさを選ぶ新走り

田中清秀

友垣の訛り余興に新酒酌む

物忘れいつもとなりぬ鯛雲

炎昼やゆらぎもせずの立話

植村公女

落ち蟬を踏みてひと日の憂ひかな

小判草畳のくらし好みけり

八朔の大鰐の湯に足もみて

今泉如雲

螻蛄鳴くや津軽出土の宋の錢

秋陰やじよんがら節の新節しんがしも

四五本の花魁草の盛りかな

杉浦弘

顔上ぐるとき蝸の鳴きさしぬ

綻ぶる夜顔の香を馳走とす

大根をやうやく蒔きし秋旱

かさね吟行会

「飛鳥山公園」 八月

田中清秀

渋沢栄一は埼玉県深谷市に生まれ農業と商業を営む家

業を手伝うかたわら尊王攘夷思想に傾倒し一橋慶喜の知遇を得て家臣となる。一八六七年のパリ万博に幕府使節の一員として渡仏、帰国後は民間の立場から約五百社にのぼる株式会社、銀行などの設立と経営に尽力し、経済や外交、公共事業に取り組んだ近代日本の基礎を築いた偉人である。平成三十年八月十日、その渋沢栄一が本邸を構えていた飛鳥山公園を吟行した。京浜東北線の王子駅に集合した後、公園の登り口にある「あすかパークレール（アスカルゴ）」で山頂を目指す。名前の由来は、車両の形がカタツムリに似ていることから来ており、子供から大人まで人気があり、公園の来場者だけでなく買い物などで高齢者にも利用されている。当日の天候は晴れ、立秋を過ぎたとは言えまだ蒸し暑い。ただ時折、気まぐれなにか雨が散策の頬を濡らす。

一枝よりもみづる秋の気配かな
ねこじやらし今降る雨の為すがまま

陽子
由利

飛鳥山公園は、江戸時代に将軍吉宗が享保の改革の一環として整備・造成されたことは知られている。当時、江戸近辺の桜の名所は寛永寺程度しかなく、花見の時期は風紀が乱れていた。その為庶民が安心して花見ができる場所を求めていたという、完成時には将軍自ら宴席を設えて、名所としてのアピールを行った。

また、現在山頂の公園には、地域の郷土資料などを展示している北区飛鳥山博物館、日本初の洋紙工場だった旧王子製紙の収蔵資料を展示する紙の博物館がある。それぞれ地域の文化や歴史の貴重な資料が整然と並び、分かり易い解説と共に立派に展示されている。涼しい館内は外の暑さを忘れさせてくれる。

法師蝉陀羅尼展示の博物館 初秋や博物館は声ひそか

周二
礼子

木々に囲まれた散策路には蝉の声が響き渡り、観音像や顕彰碑が立ち、のんびりとした雰囲気漂っている。また、公園の中心の噴水や舞台には子供連れの家族が憩い、蒸気機関車や都電の展示物からは子供たちの歓声が聞こえてくる。春の桜だけでなくツツジやアジサイも多く植えられており発芽、開花、新緑、落葉など樹木の移り変わりを通じて一年の季節が感じられる。

秋蟬や形ばかりの能舞台
月出石濡らして過ぐる秋驟雨

さち子
紀政

公園の奥には洪沢資料館がある、かつて栄一が住んでいた旧洪沢邸跡にその生涯と事業に関する資料を収蔵展示し、関連イベントなども開催されるという。千八百七十九年この地に賓客接待用の別邸を構え、以降庭園内の整備、日本館、西洋館、茶室、文庫などを建設し、千九百一年から九十一歳で亡くなるまで本邸として使用している。空襲により多くを焼失したが晩香館と青淵文庫など一部は現存している。小規模ながら気品と風格のあり、書斎の窓越しでくつろぐ栄一本人の写真も残されている。

賢人の住みし庭園秋日濃し
建物に身体沈むる残暑かな
邸宅に暑さの残る彩タイル

素山
皓一
清秀

寿や竜がデザインされたガラスのパッチワークや洪沢家の家紋をモチーフにしたタイルが開口部に張り巡らされている。芝生の庭園を歩きながら往時の栄華と繁栄に思いをはせる。

あるだけの命振はせ秋の蟬
秋の蚊に刺されて下る飛鳥山

京子
正規

帰りもアスカルゴで下山する、まだ暑さが残る散策はどうしても楽な道を選んでしまう。句会の開催は王子駅近くの十七階の高層ビル「北とびあ」のレストランの一室を借り、昼食をとりながら作句に没頭する。周りの喧騒を気にせずに投句と選句を行うのは苦労したが何とか終了。その後は最上階までエレベーターで昇り無料展望コーナーから東京湾や関東平野の遠望を眺め、さらにレストラン「山海亭・王子」で句作の評価と修正、推敲談議に花を咲かせた。

■かさね吟行会■

日時 十月十二日(金)
場所 次大夫堀公園
集合 大井町線・田園都市線
二子玉川駅 十一時集合
申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

『酔いの徒然』（七八）

丸山酔宵子

『神長官守矢史料館 空飛ぶ泥舟と高過庵』

西日本の想像を絶する水害、東日本は梅雨明けの酷暑が続く「海の日」を挟んだ連休。諏訪大社近くにある古代から諏訪大社上社の神官だった守矢家の『神長官守矢資料館（しんかんちようもりやしりようかん）』を訪ね、そして長野を横断、諏訪から蓼科、白樺湖を経由する山越えて浅間山の麓、西軽井沢御代田のログハウスに向かった。

混雑を予想して早朝に家を出たがもう既に首都高速から中央道の入口まで渋滞。中央道に入っても談合坂までトイレや昼食の為にパーキングエリアに入る長い車の列が長々と続いて、阿弥陀堂でやっと昼食をとったのが、「ヤレヤレ！」出発から5時間の午後1時。

諏訪インターを下りて20号線を上諏訪に向かうと、屋

根から木を突き出させている奇想天外な形をした建物が
お目当ての守矢史料館である。当地で生まれた建築史家
兼建築家で、東京江戸博物館館長の藤森照信先生のデザ
イン。建築材料は地元産に拘り、諏訪の自然と中世の信
仰を組み込んだモチーフである。

藤森先生は東北大学工学部建築学科（歌手オフコース
小田和正と同期）を卒業し、東京大学院で近代日本建築
史を研究し、建築探偵団を結成する一方、赤瀬川順平、
南伸坊たちと路上観察学会を立ち上げたりして、市井の
街並や建物を好奇心溢れる優しさで見守っている痛快な
先生なのである。

100円の入場料を払い靴を脱いで中に入ると高い土
壁一面に30頭にもなる鹿の頭部が飾られ、その下には白
兎の串刺しとその内臓そして盃が展示されている。これ
は毎年4月15日に行われる諏訪大社の奇祭「御頭祭（お
んとうさい）」の江戸時代まで行われていた大饗宴の再
現なのである。

神長官守矢史料館を山の方によっていくと、藤森照信

先生発想デザインの茶室「空飛ぶ泥舟」が空に浮かんでいて、下から見ると将に空を飛んでいる。更に左に回り込んで畦道を歩いて行くと、高い木の上に鎮座している茶室「高過庵（たかすぎあん）」が見えてくる。アメリカの Time 誌に「世界でもっとも危険な建物トップ10」に選ばれた由緒正しい建築物なのだ。因みに1位はあのピサの斜塔だそうだ。

濃い緑に囲まれた諏訪の山々、紺碧の空にもくもくと湧き上がる入道雲、蓼科を越え白樺湖、上田そして東御（とうみ）まで。車の窓を開ければ、日差しはまだ暑く紫外線も強い。爽やかな高原の空気をいっぱいに浴びる。夕陽に映える信州の山々を眺めながらの露天風呂と冷え冷えのビール……果たして日暮れまでに間に合うか……。

冷房をつけて

窓開け信濃路を

酔宵子

「江上浩二の独り言」 10 江上浩二

オリンピック前の北京 ③

ちよつと古い建物や道路周辺の段差を固めたようなコンクリートは形も不揃い、固め方もいい加減にみえ、強度も小さいのではないかと思いました。古い建物の改修も行われており、ある一面では外壁の色を赤茶けた色に塗って、レンガ製ではないのですが、レンガ風に突貫工事をしているところもありました。高速道路もコンクリートを固めた土台の柱に、板状のやはりコンクリートを固めたのが簡単に乗せられているだけで、振動を防ぐ厚いゴムパッドが柱と道になる板状のコンクリートの間に挟んでいるところもありました。北京国際飛行場の最新のドーム状の建物のアーチ上の鉄骨の柱と比べると、従来技術で造つてあることが分かります。

業界の話になりますが、日本のように同業者の集まりもあり、例えばxxx協会とします。該当業界では資格認定や登録が必要で、該当業界の要件を満たさないと登録取り消しになるようで、該当業務の標準化や人材育成、

セミナー開催も積極的に行つていようでした。外国企業の加盟も許されていました。会費は売上に準じた額、海外企業は一定額（比較的安いですが、年5000元などありました）で、日本国内の業界団体と同じ構成と思ひました。会長さんの選任など、日本では主要幹事会社で持ち回りのごとくされていますが、選挙で行うそうで、人として皆さんに一番受けがいい方が選ばれるといつておりました。

4章・そっくりさん（人）

企業訪問の初日の一番の会社で〇名とお会いした。そこで吃驚、女性マネジャーさんが知っている人にそっくり。

背丈、顔形、瓜二つ。世界に〇人自分に似ている人がいるとよく言われるけれど、本当に以前一緒に仕事をしていた女性に似ていたもので、驚いてしまった。頂いた名刺に、知っている女性の名前を書き込んでおいた。私は名刺を頂くと忘れないように先方の特徴をちよつと書き込むようにしています。

翌日やはり、企業訪問で行き先が分からず、タクシー

がやっと目的の地付近に着いた。降りて若い人に訪問すべきビルをタクシーの運転手が聞いた。また、吃驚。その若い人の顔が私の従兄弟にそっくり。歳は従兄弟よりやや若い、背丈、顔かたちこそっくりだった。北京へ来ているはずは無い。

日本へ帰る日、知り合いの中国人のお母さんがホテルまで見送りに来て頂いた。背が高く、面長の顔、中国の北部に多い民族を代表するような目も細い。亡くなった叔母さんにそっくりだった。背丈は違うか、面長の顔はそっくり。私の叔母さんの娘はもつと似ていたような気がした。アメリカに住んでいるので久しく会っていないが若い時の面影が非常に似ていた。

中国の人口は約13億人、それも単一民族ではなく、南方系、北方系だけでなく、もつと複雑な古来からの民族の集まりが中国をなしてきた。周辺の国々も、南はベトナム（漢字で越と書きます）、朝鮮半島の北・南、昔なんて国境もいい加減、人の往来は戦争や事件、厳しい天候の変動で逃げたり、避難したり、貧しさから逃れるために移動してきたはずで、人口1億の日本民族も単一でない。中国、朝鮮半島と似た図式であろう。その証拠

に、ちよつと中国に出かければ、人口が10倍だから、知っている人に似た方を見出せる確率が高いのであろうと納得した。

楽しい時間 71

山本紀久雄

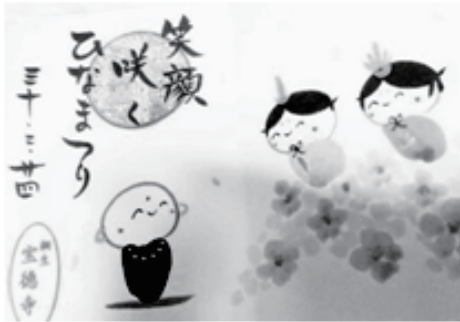
2018年8月31日

神にならなかつた鉄舟・・・その一

現在、「御朱印ガール」ともいわれる御朱印ブームとなっている。このはじまりは、1990年代から霊的な力が満ちている場所とされる「パワースポット」を訪れるブームが徐々に高まり、今では「パワースポットめぐり」はすっかり一つのアクティビティとして定着した感があるが、そのようなパワースポットの一つである神社や寺院を訪れ、御朱印を集める「御朱印ガール」が急増している。

筆者の知人女性にも「御朱印ガール」がいて、先日、集めている御朱印帳写真を参考までに送ってもらったが、確かにブームと感ずる。

御朱印とは、神社や寺院が実施している参拝者向けの押印である。僧侶や神職が寺院・神社やご本尊の名称・日付などを墨書することが多く、それを収集する女性が増えている、神社や寺院に行くと「御朱印はこちら」といった看板を立てているところもあり、



目にしたことがある人も多いだろう。

先日、明治神宮に参拝したが、やはり御朱印を頂くところに多くの人がいる。本来、御朱印は納経した証しとして頂くものだったといわれているが、現在では無料もしくは300円ほどで書いてもらえる気軽さもあり、「御朱印帳」を持ち歩いて集めている人が増えている。実際、多くの神社では10年前に比べて御朱印を求める女性が5〜10倍に増えているともいわれている。

御朱印は江戸時代に始まり、元は巡礼の際に納経した証しとして授与されていたようで、明治以降、納経なしでも参拝したことでいただけるようになり、参拝記念となって、御朱印が参拝記念として注目され始めたのはここ数年のこと。

巡礼をするのは今まで高齢者が多かったが、パワースポット巡りのブームから若年層や女性にも人気が広がって、女性に受けるようなオシャレで可愛い御朱印帳も登場してきた。現在では御朱印の種類も増え、お花や紅葉の印が押されていたり、カラフルな色紙が登場したりと、御朱印そのものが女性向けになってきたような感もする。

コレクションするという意味では男性ファンも多い御朱印だが、女性の巡り方には特徴があるようだ。ハマりだすとどんどん欲しくなり、居住地の近くだけでなく、御朱印をいただくための旅がしたくなってくる。

ひとりで黙々と御朱印集めだけに専念しがちなコレクタータイプの男性に対して、同じ趣味の友人と御朱印談義をしながら巡るのが「御朱印ガール」。目的は御朱印だけでなく、その土地の名物を食べたり買い物したり、美しい花や景色を堪能したりして、癒しを感じることに。日付が入った御朱印を旅の

記録とする傾向があるのも女子ならではのこと。

女性の参拝者が目立つようになってからは、御朱印帳だけでなく、お守りなどの授与品も華やかになり、神社が集まるエリアにはおしゃれなカフェも登場。寺社参拝だけでない楽しみがある場所に女性は集まってくる。

新しい旅のスタイルとして定着し始めた御朱印巡り。外国人観光客が納経所に並ぶ姿も見られるようになって、漢字が好きな外国人にとって、墨で書かれたダイナミックな筆遣いの御朱印はお土産にピッタリ。

最近では、修学旅行生や小学生までもが御朱印収集している姿を見かけるようになってきた。女性だけでなく世代を超えて、人種を超えて注目が集まる御朱印の人気はまだまだ続くだろう。

このような御朱印ブーム、それはお寺や神社が存在するからであるが、ここでは神社に絞って考えてみたい。

いったい神社に祀られている神様とはどういう存在なのだろうか。それを定義しておかないと、本稿の「神にならなかつた鉄舟」は進まない。

実は、本居宣長が神を定義している。『神道の逆襲』（菅野覚明著）を参照してみよう。

《本居宣長（1730～1801）の定義はこうである。「さて凡て迦微とは、古御典等に見えたる天地の諸の神たちを始め、其を祀れる社に坐御霊をも申し、又人はさらにも云ず、鳥獸本草のたぐひ海山など、其余何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迦微とは云なり。（すぐれたるとは、尊きこと善きこと、功しきことなどの、優れたるのみを云に非ず、悪しきもの奇しきものなども、よにすぐれて可畏

きをは、神と云なり。）」（『古事記伝』三之巻）

宣長のいうところは、それが人であれ、動植物であれ、自然現象であれ、ともかくもそのものが、私たちにとって「可畏き物」、すなわち身の毛もよだつような異様なものとして出会われれば、それが神だということである。この定義は、今日私たちが、名人・達人・奇人・変人の類を「〴〵の神様」と呼んではばからない、日本語の「カミ」という言葉のニュアンスをよく言い当てている》

《人々は確実に神のおとずれを知ることができた。というのは、神さまがやって来る時には、必ず何らの仕方でそのことを示し現すものであるという共通了解が、人々の間にあったからである。神さまが自らを何かの形にあらわすことは、古来「たたり」と呼ばれてきた。今日では、たたりといえは何か悪しき霊のもたらす災いとはかり考えられているが、もともとは、神さまがその威力をあらわすこと一般をさしている。「たたり」という語も「虹がたつ」などというときの「たつ」、つまり、「あらわれる」という意味の「たつ」と関係があるとも言われている。そういうわけで、神さまの出現（たたり）には、さまざまな形がありえた。しかし、とくに顕著なのは、やはり何といつても、地震・噴火・豪雨・落雷・疫病といった災害・災厄の類であった。そうした大規模な災いと共にあらわれる神さまの威力は特に絶大なものと感じられたから、その経験は多くの人の記憶に深い印象を残したとみられるのである》

鉄舟は江戸無血開城という偉大な業績を遺したのに、どこにも「鉄舟神社」は存在しない。その疑問持ちつつ、神の検討を次号でも続けたい。

絹の話 (95)

「アトリエトレビ」 今 泉 雅 勝

野蚕シルクで男物ブラウスを作る

シルクブラウス着用経緯

20年位前女性物の製作の傍ら、同じ素材のタッサールク(野蚕生糸)で男性物を作り着用していましたが、長年着慣れて来た綿やウールに比べてあまりにも軽く柔らかいので、着始めた当初は何となく体が戸惑っている様な感じがありました。暫く着慣れて来ると接客や集りの時など積極的に着るようになり、以来、秋から冬にかけては4~5回、汗の出る夏は2日ほど着て、やや冷たい水でシャンプーを二滴ほどたらし手洗いして来ましたが、今日まで何処も傷まず使い続けています。

さすがに化学染料で染めた色は肩の回りが脱色してきましたので、奄美に泥染に行つたついでに、色ムラになつたままを泥染めに見せました。染め上がりは均一で見事な黒茶に染まりその艶やかさは30年前と何ら変わる所なく、新品同然となり今日も現役で使用しています。結局、長い目で見れば安価で気持ちのよいだけ「徳」をしたような気がします。

男性用シルクブラウス素材選び

絹には沢山の種類がありますが、通年着用の男物のブラウスとしてタッサール蚕の生糸と手糸糸の二種類を作つて試着してみる事にしました。

タッサール蚕生糸は目視ではよく判りませんが、家蚕糸と比べて糸が2~3倍太く扁平で、所々節があつてどこか不均一で粗々しさが有り、光をより多く乱反射させ強い光沢があるので男向き素材と思ひました。

タッサール蚕の手糸糸は甘摺りの繭の自然色を生かした生地を使用しました。

染色

生糸使用の方は男の着物では泥大島が人気ありますので、奄美大島で泥染めにしました。

手糸の方は繭の持つ薄茶の自然の色(タンニン含有)で、繭が野外で木の枝にぶら下がる固い黒い帯(へた)の部分糸にして、適宜に緯(よこ)糸に入れた緋の様な素材を無染色で使いました。

出来上がり外観

タッサール蚕絹は家蚕絹には見られない重厚感のある不

思議な艶は男らしさを充分発揮してくれます。

外気温が30℃以上の時は見た目の涼しさを感じてもらうため生糸製を着用し、25℃以下の時は暖かみを感じる紬製も着用するようにしました。

タサール蚕の生糸の場合は不思議な艶に多くの女性がやや距離をおいて「綺麗ね」という視覚反応をします。(女性の目は男性の目より光の乱反射に敏感)

紬の場合は艶があまりないので、黒い帯の斑まだらに入った風合の柔らかい生地にしてみました。

その反応は女性が近くに寄って来て、ブラウスに触らせて欲しいと云う素振りで「面白い、いいわね」と云う反応をします。

触覚で物を見る、女性特有の反応があります。

着用感

タサール蚕の生糸は家蚕絹に比べて25%程度軽いので、着始めはやや所在ない感じがしますが、次第に何となく雲の上の別世界を散策している様な気持ちになります。どんな繊維にも無い感触です。

気温と湿度が高く汗が流れる様な時、絹は吸湿性を發揮して汗を吸い取りますが、繊維の中の貯水槽が満タンになると、ジメジメした不快感が増して来ます。絹の放湿機

能がフル活動しても間に合っていないのです。

そんな時30分位エアコンの効いた涼しい所に居ると、除湿され不快感は和らぎます。同時に気化熱が熱くなった体を冷やしてくれます。

また、湿った襟元等が目立つたシワになる事もなく、フレッシュに仕事に戻れます。

さらに絹の抗菌性によって発汗による汗臭は体にも、ブラウスにも起こりませんので接客用には好都合です。

寒期は保温性に優れた絹といえども限界があります。下着も絹にして二枚重ねにすると考えた以上の保温効果を得られます。薄着に見えても血行が促進され温かさが増します。

低体温防止には大きな効果があるようです。

タサール蚕の絹の着用は1日の疲労感を少なくしてくれる優れた自然素材と言えるでしょう。

不老長寿

絹を着る事は美しさを表現する事ばかりでなく、絹の持つ様々な人に有用な機能性を享受して、知らず知らずのうちに健康維持に役立っていると思われれます。

将に、絹は不老長寿の素材と言えないでしょうか。

漢詩研修 (二十四)

千代田岳精会 平井茂行

大楠公

河野天籟

赤坂の城千窓の屯

妖雲漠々天を捲いて
臻る

夢は新たなり
笠置山頭の暁

花は散り香は薫る
芳野の春

涙も呑んで見に別る
桜井の駅

笑って死に就く
湊川の津

南風競わず地に塗ると
難も

偉績長えに伝う
忠烈の神

【作者】

河野天籟 一八六一～一九四一 熊本県玉名(たまな)郡長洲町(ながすまち)の人。名を通雄(みちお)といい、天籟は号。熊本師範学校を卒業後小学校長を歴任し、作詩に志すこと四十年、詩賦自由自在にして漢詩百余篇を蒐録(しゅうろく)した「孟浪餘滴」(もうろうよてき)の冊子を著す。昭和十六年五月没す。年八十。

【語釈】

大楠公…鎌倉末期の武将楠木正成(まさしげ) 後醍醐天皇の南朝再建に尽力した ・赤坂之城…楠木正成が挙兵した城 河内の国金剛山にあり 北条氏の大軍を迎撃した ・千窟屯…赤坂城と同じ山にある城 正成が籠城した ・妖雲…怪しい気配の雲 北条軍を暗示する ・夢 新…「太平記」によると元弘元年後醍醐天皇が笠置山に移られたとき 本殿の南にある大樹の南の枝がことに繁り天子を譲り救うのは楠姓だという 靈験がある夢をご覧になったとある ・笠置山…一三三一年後醍醐天皇が逃れた地 京都府相楽郡笠置町にある山 ・櫻井驛…大阪府三島郡島本町桜井にある地名 ここで正成・正行(まさつら)の親子が今生の別れをした ・湊 川…神戸市兵庫区にある ここで正成・正季(まさすえ)が足利勢と戦い戦死した ・塗地…敗れ去る

『俳聖』松尾芭蕉（その二）奥の細道と秋の句 中屋保之

〔越後路 元禄二年六月二十五日〕七月十二日）
酒田の余波日を重て、北陸道の雲に望。遙々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百世里と聞。鼠の関をこゆれば、越後の地に歩行を改て、越中の国一ふりの関に到る。

荒海や佐渡によこたふ天河

〔市振の宿 元禄二年七月十二日〕
今日は親しらず・子しらず・犬もどり・駒返しなど云北国一の難所を越て、つかれ侍れば、枕引よせて寐たるに、一間隔て面の方に、若き女の声二人計ときこゆ。年老たるおのこの声も交て物語するをきけば、越後の国新潟と云所の遊女成し。伊勢参宮するとて、此関までおのこの送りて、あすは古郷にかへす文した、めて、はかなき言伝などしやる也。白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさまじう下りて、定めなき契、日々の業因、いかにつたなしと、物云をきくきく寐入て、あした旅立に、我々にむかひて、「行衛しらぬ旅路のうさ、あまり覚束なう悲しく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍ん。衣の上の御情に大慈のめぐみをたれて結縁せさせ給へ」と、泪を落す。

一家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば、書とゞめ侍る。

〔那古の浦 元禄二年七月一三〕一四日）
くろべ四十八が瀬とかや、数しらぬ川をわたりて、那古と云浦*に出。担籠の藤浪は、春ならずとも、初秋の哀とふべきものをと、人に尋れば、「是より五里、いそ伝ひして、むかふの山陰にいり、蟹の苦ぶきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじ」といひをどされて、かゝの国に入。

わせの香や分入右は有磯海

〔金沢 七月一五日〕一三三）
卯の花山・くりからが谷をこえて、金沢は七月中の五日也。爰に大坂よりかよふ商人何処と云者有。それが旅宿をとにもす。一笑と云ものは、此道にすける名のほのほの聞えて、世に知人も侍しに、去年の冬、早世したりとて、其兄追善を催すに、

塚も動けわが泣く声は秋の風

(小松 元禄二年七月二四日～二六日)

小松と云所にて

しほらしき名や小松吹萩すすぎ

此所、太田の神社に詣。実盛が甲・錦の切あり。往昔、源氏に属せし時、義朝公より給はらせ給とかや。げにも平士のものにあらず。目庇より吹返しまで、菊から草のほりもの金をちりばめ、竜頭に鍬形打たり。真盛討死の後、木曾義仲願状にそへて、此社にこめられ侍よし、樋口の次郎が使せし事共、まのあたり縁起にみえたり。

あなむざんや甲の下のきりぎりす

(曾良との別れ 元禄二年八月五日・六日)
曾良は腹を病て、伊勢の国長島と云所にゆかりあれば、先立て行に、

行行てたふれ伏とも萩の原 曾良

と書置たり。行もの、悲しみ、残るもの、うらみ、隻鳧のわかれて雲にまよふがごとし。予も又、

今日よりや書付消さん笠の露

(敦賀市 元禄二年八月一四・一五日)

潮白根が嶽かくれて、比那が高あらはる。あさむづの橋をわたりて、玉江の蘆は穂に出にけり。鶯の関を過て、湯尾峠を越れば、燈が城。かへるやまに初雁を聞て、十四日の夕ぐれ、つるがの津に宿をもとむ。その夜、月殊晴たり。「あすの夜もかくあるべきにや」といへば、「越路の習ひ、猶明夜の陰晴はかりがたし」と、あるじに酒すめられて、けいの明神に夜参す。仲哀天皇の御廟也。社頭神さびて、松の木の間にもり入たる、おまへの白砂霜を敷るがごとし。

十五日、亭主の詞にたがはず雨降。

名月や北国日和定めなき

(大垣 元禄二年八月二一日～九月六日 奥の細道終着)

露通も此みなどまで出むかひて、みの、国へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入ば、曾良も伊勢より来り合、越人も馬をとほせて、如が家に入集る。前川子・荆口父子、其外したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふがごとく、且悦び、且いたはる。旅の物うさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮おがまんと、又舟にのりて、

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

(参考文献 大塚甲山編「芭蕉俳句全集」「芭蕉自筆 奥の細道」岩波文庫 他)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2018年9月7日

人間の基本

挨拶をしようね

人の話を聞こうね

相手の立場になって考えようね

弱い者いじめは駄目だよ

困っている人がいたら助けようね

感謝の気持ちをもとうね

これは

小学生もしくはそれより早く

周りの大人から教わることですよね

例えば

野球 サッカー バスケットボール

華道 茶道 習字

仕事 職人 勉強

などなど

やることほとんどの事に

基本があるように

これらは

人間の基本のような気がします

こんなにも早く

わかっていったのか…

大人になって

悩んだ時はこの基本に戻ってみると

良いのかもしれませんがね

2018年9月10日

そろそろ肌の

虫の鳴き声も

秋らしくなってきました

気温は夏ですが(笑)

少しずつ秋めいてくると

空気の感じが変わります

そうすると肌が乾燥し始め

そろそろ肌の問題が出やすくなってきました

肌は乾燥してきたかな？

または乾燥前に

馬油を塗り始めて下さいね

乾燥は肌の万病の元です

くれぐれも気をつけて行きましょう

2018年9月12日

身体を休めて冷やさない

起きる時間は一緒に

寝る時間を30分でも早くして

身体を休ませましょう

昨日今日と

過ごしやすい気候ですネ

以前も『本田のひとり言』に書きましたが

朝晩冷え込むときは

睡眠中 起床時 に

寒い！ と感じない事です

あらかじめ

着衣を一枚増やしたり

掛け布団を変えたりして

身体を冷やさない様にしましょう

後は

寒暖差で身体が疲れます

睡眠時間なんですが

2018年9月14日

腹八分

など痛みや違和感を感じます

この季節の変わり目は

暴飲暴食を止め

食事を腹八分

冷たいものを摂取しない

などして内臓に負担をかけない様に

していきましょう

今日は朝から雨ですね

昔は雨だと気分も下がり

あまり好きではありませんでしたが

歳を重ねることに

秋雨だったり季節季節の雨を

楽しめるようになりました

植物も元気になりますからね(笑)

さて

この気温差

内臓に負担がかかります

そうすると

肩や首

背中

「歴代天皇御製歌」(九十三)

貫名海屋資料館

「昭和天皇」③

(昭和二十七年・一九五二年・五十二歳)

連合軍の占領終る

風さゆるみ冬は過ぎてまちにまちし八重櫻咲く春となりけり
國の春と今こそはなれ霜こほる冬にたへこし民のちからに
花みづきむらさきはしどい咲きにほふわが庭見ても世を思ふなり

東北視察の折に

秋ふかき山のふもとをながれゆく阿武隈川のしづかなるかな
ありし日の母の旅路をしのぶかなゆふべさびしき上の山にて

立太子禮(十一月十日)

このよき日みこをばいはふ諸人のあつき心ぞうれしかりける
古の文まなびつつ新しきのりをしりてぞ國はやすからむ

(昭和二十八年・一九五三年・五十三歳)

歸國

すこやかに空の船より日のみこのおり立つ姿テレビにて見し

新穀献上者に

にひよね

新米を神にささぐる今日の日(米・五穀のこと)に深くもおもふ田子のいたづき

ひととせ

一年の誠こめたるたなつものささぐる田子にあふぞうれしき

(昭和二十九年・一九五四年・五十四歳)

飛行機上より

松島も地圖さながらに見えにけり静かに移る旅の空より

伊豆西海岸堂ヶ島にて

たらちねの母の好みしつはぶきはこの海の邊に花咲き匂ふ

萬葉秀歌の鑑賞

津之地直一

あしひきの山の雫に妹待つと吾立ちぬれぬ山の雫に

足日本乃 山之四付二 妹待跡 吾立所沾 山之四附二(②)一〇七、大津皇子)

(口訳) あなたの来られるのを待つとて、私は山の雫にすっかり濡れてしまいましたよ!

石川郎女いづるめに贈られた歌。「あしひきの」は山の枕詞であるが、その意味及び「山」にかかるかかり方はよく分らない。「き」の音はこの原文では「木」とあつて乙類であるが、「足引乃」(④五八〇等)「足曳之」(⑩一八四二等)等では四段活用動詞「ひく」の連用形として訓むところであるから、甲類の音である。既に原意が不明になつていた結果だと思われる。「あし」も「足」と見ず「葦」と見た方がよいという説等も出ている。「山の雫に」を繰返し一首が単純な姿になつてゐる。この歌形は前に鎌足の歌に「安見児得たり」を繰返したのがあつて指摘した。一首、甘美な情緒がよむ者の心を惹く歌である。この歌に対して郎女は「吾を待つと君が濡れけむあしひきの山の雫にならましものを」(二〇八)という歌を和え奉つてゐるが、この歌、前歌を息を継いだ如くそのままに受けて、しつとりした媚態を含みつつ、しかも才智もうかがわれる返歌となつてゐる。

吾が背子を大和へやるとさ夜更けてあかとぎつゆ曉露に吾が立ちぬれし

吾勢枯乎 倭辺遺登 佐夜深而 鷄鳴露爾 吾立所霑之(②一〇五、大伯皇女)

(口訳) 私のいとしい弟を大和へ帰してやるといっているので(いつまでも見送り佇んでいて、いつしか)夜が更けて、あけ方近い露に私は立ちぬれたことです。

大津皇子(天武天皇の御子で、天皇崩御後謀反の事発覚し、訳語田舎に死を賜わった。御年二十四。)がひそかに(題詞にあるこの語から、謀反発覚直前の頃で、身を隠しての行動であつたことが想像される)伊勢神宮に行かれ、その同母姉君に当る齋宮大伯皇女(このとき廿六才)に逢われた。この作は皇子がその伊勢から大和に帰られる時、皇女が詠まれたもので、「わが背子」は「吾妹子」と対応する呼称で、女性から親愛の情をもつて男性を呼ぶ言い方であるが、必ずしも恋人、夫婦の間にのみ使うと限らないこと、前の巻一・一一やこの歌に見る如くである。「やる」は出してやるといので、皇女の意志の活いている語である。「曉露」は暁方の露、夜更けてから暁に至る間、ずつと戸外に立ちつくして暁の露にぬれたよの意のところ、「ぬれし」と、係りのない連体形止めになつてゐるのは、こゝに深い余情をこめた表現である。一首、ひきしまつた調子の中に、姉弟別離の情がこまやかに詠まれている。

御津磯夫短歌鑑賞 10

「月虹」 鮫島 満

「とも」いいことを歌の形にただけだと言われたのと同じことなのである。

作者はこの一首のとなりに、

本来のピッチングではないなどと聞こえてくるのも常套にして

よく分かると言ふはことさら言はずともといふに同じき批評言なり 『かうしんばら』 昭和五十五年

作者は歌人だからこの一首は短歌の批評に対する考えを詠んだものであろう。

「よく分かる」という評言は時折目にする。これは、あなたの歌は私にはよく分かるよということであり、きつと誰にでも分かると思うよということである。もつと詳しく言えば、日常よく目にすることを丁寧に描いているとか、私にもそんなことがあったとかいうことなのである。

ところが多くの歌人は日常生活の報告やありふれた感想を歌の形にしない方法をいつも考えているものだから、「よく分かる」と言われても喜ぶことはできないのである。それどころか、その言い方はへことさら言はず

を配している。作者の歌の配列は前後の歌との間に必ずしも関連があるとは言えないのであるが、「聞こえてくるのも」とあるので、ここでは二首をひと組のものと考ええる。野球の解説には言わずもがなのことが多く、たとえば、「三塁にランナーがいるから打たれら一点入る」前ほどの勢いが無い」というのを聞いたことがある。右の歌の「本来のピッチングではない」は聞いている人に何の情報も示したことになるのである。作者はこのことを「常套」（全く人に言うほどのことではない。とても専門家の解説とは思えない）という語で表したのである。

歌を詠む人も、読まされる人もこのような意識を常に持つようにしたいと言うと、作者に、読みが浅いとせせら笑いされるだろうか。

「氷魚」のことから (213) 岡本八千代

台風二十号の大嵐が去ってやっと太陽の光が照らし出した。折りしも第百回の全国高校野球のまっ最中。またアジア大会の奮戦中。

そして、九月が近づいてくる。九月は、子規の命日「癩祭忌」「糸瓜忌」ともいう九月十九日が――。

八月二十四日の読売新聞に、「子規『歳旦帳』新たに2冊』というのが掲載されていた。

「歳旦帳」というのは、子規の家に正月に集まった訪問客との句会の様子をユーモアに書かれたものらしい。(東京の子規庵保存会に22日発表による)

子規の「歳旦帳」は明治30年(1897年)から始まったとされ、今回見つかったのは同年の2冊)子規直筆で表紙に「丁酉遺珠」「福引」と記され、子規と高浜虚子や河東碧梧桐ら弟子11人の計21句から、福引遊びに興じた様子などがわかるらしい。その時の子規の句二作。

○新年や昔より窮す猶窮す

○福引にキウスを得て発句に窮す
という前書きが添えられ、福引で当った急須と生活苦を掛けている。らしい。私も東京の子規庵へ今一度行きたいなあ。

かつて行った時、子規庵の前の細道を隔ててすぐ前が中村不折の書道博物館があった。画家でもあるもまた書道家でもあったのだ。中村不折は画家としてフランスに留学して帰ってから太平洋画家に参加した洋画家である。本名は、鉦

太郎と言った人。

子規はこの不折と「小日本」に居るようになって、毎日顔を合わすので、顔を合わせるとすぐ画論を始めたいという。当時、子規は、日本画崇拜者で西洋画排斥者であった。不折は、フランス帰りの洋画家だから。

○子規が富士山は善い山だろろうという、不折は俗な山だという。

○子規が松の木は善い木であろうという、不折は俗な木だという。

○達磨は雅であろうという、達磨は俗だという。
○日本の甲冑は美術的であろうという、西洋の甲冑の方が美術的だという。

かくして、子規と不折は日々衝突するから

「同じ人間の感情がそれほど違うものかと、餘り不思議に思つてつくづくと考えた。其内ふと俳句と比較してみても大に悟る所があった。俳句に富士山を入れると俗な句になりやすい、俳句に松の句もあるけれど松の句には俗なのが多くて、却って冬木立の句に雅なのが多い。達磨なんかは俳句に入れると非常に厭味が出る。これ位の事は前から知っていたのであるけれど、それを絵の上に推し及ぼす事が出来なんだ。」と。

しかし、子規は、「秋海棠を見てみると、なんとなく絵心が浮んできたので、急に絵具を出させて半紙を展べて、いきなりその秋海棠を写生した。その絵を不折君に見せたら「非常にほめられた」と言つて喜んでいた。

編集室だより【二〇一八年八月】

○「夜墨水を下る」服部南郭作。

隅田川を舟で下った折の漢詩を吟じていると、長かった外国の生活から帰ってきて、まず、隅田川に掛っている橋、レインボーブリッジから、白髭橋までを描いてみよう。隅田川通いから、日本の生活を始めたのだったことが甦った。

直接、橋々のことはもちろん、それぞれの橋のまわりの状況、歴史、物語り、その時々川の流れ、春夏秋冬…。それにも増して、描き終えてのお酒の美味しかったこと。

そんなに昔の話をしているのではないのに、おおくは新しい橋に姿を変えている、まわりの景色の変わりよう、驚くことばかり起る。また新しく描かない…との思いを新たにしたい。

○姉の一周忌。姉と私と、浄土真宗の家に育った。妹の法事は禪宗でとりおこなわれた。私は、止めてきたけれど、ひととき神道だった。なぜ！こういうことになるのだろうか、納得出来ないままでいる。

私自身は、宗派とかいうことではなく、天然の材から、仏像を彫りいだす仏像彫刻に、素直に携わっている。

○飛鳥山俳句吟行。

あまりに暑いから、王子飛鳥山の三つの博物館での吟行に。

貝塚の時から、近代工業の発祥の地となるまでを、三つの博物館が、しっかり教えて下さる。毎日通る辺りが、異った目で見えるようになった。面白い。

○ペルセウス座流星群。

「明け方近く、1時間に40個程も見ることが出来ます！」とのこと。やっぱり一つも見つけることなく、あきらめた。

○ミケランジェロ「最後の審判」の描かれてゆく映画を、テレビで見ていた。その時、映画の中に入り込んでしまったのかと、稲光り！雷鳴！恐ろしくなり、エアコン、パソコン、テレビ…全部消してしまい、絶対見なかった映画が見られなかったけれど、ま、仕方ない、稲妻は私をつらぬいたほど凄かった。

○サマソニック・2018。

我家の年中行事になっていて、外国から、多くのアーティスト達を一緒して、玉由と由野が日本へやってきた。

サマソニの前夜祭からはじまる。「ソニックマニア・2018」

幕張メッセの巨大空間で、バルセロナ、イビサをはじめ、ニューヨーク、香港、ドバイ、上海…を駆け抜けてきた日本初「e.l.r.o.w」。パフォーマー達と一緒に、夜からはじまり朝まで踊りあかす。アーティスト達の造りだす素晴らしい音響にのって…踊りつづけて朝がきた。

野菜・まんだら

(8) アーティチョーク



- キク科のチョウセンアザミ属。多年草。
(朝鮮半島には縁はなく、異国風の意味)
- 地中海沿岸原産。
- 開花前の蕾の花芯を食用にする。
- 明治初年に渡来したが、日本人の嗜好に合わず、現在も普及するところまでゆかない。
- でんぷん質に富んだゆり根の感じに近い歯ざわり。ビタミンA、B1、C、カルシウム、カリウムを多く含む。
- 食物繊維が多く、コレステロールや糖質などを体外にもって出る働きをする。高脂血症や糖尿病の予防に有効な野菜

- アルゼンチンに住みはじめてすぐ、八百屋の店先で、山と積まれるアーティチョークに出逢った。食べ方を教わり、大鍋を買い、レモンを買い、アーティチョークに取り組む。
- 灰汁が強いから、塩少々とレモンを入れて、20分ほど茹でる。と教わった。



- 茹であがると、蕾を持って、その外側の萼を外側から一枚づつはがし、(塩、レモン、私は一滴しょう油を加える)ドレッシングをつけて、歯でしごくように柔らかい部分を食べる。一枚一枚どんどん食べてゆくと、中心のアーティチョークハートにゆきあたる。この達成感と美味しさはたまらない。今でも私の一番好きな食べ物となっている。



- カリフォルニアをドライブしていた時、偶然、見渡す限りのアーティチョーク畑にゆきあたったことがあった。ここに住みついてしまおうと思ったほど。

今泉由利

「三河アララギ」について

- ◇三河アララギ発行所 〒114・0021
東京都北区王子本町一・二六・六・A
- TEL (03) 五九二四・二〇六五
- ◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>
E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
- ◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子
- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- ◇会員・今まで会員の方。希望される方。
- ◇会費制 廃止。
- ◇新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。
- ◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九
- ◇原稿送付先 〒114・0021
東京都北区王子本町一・二六・六・A
- ◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。